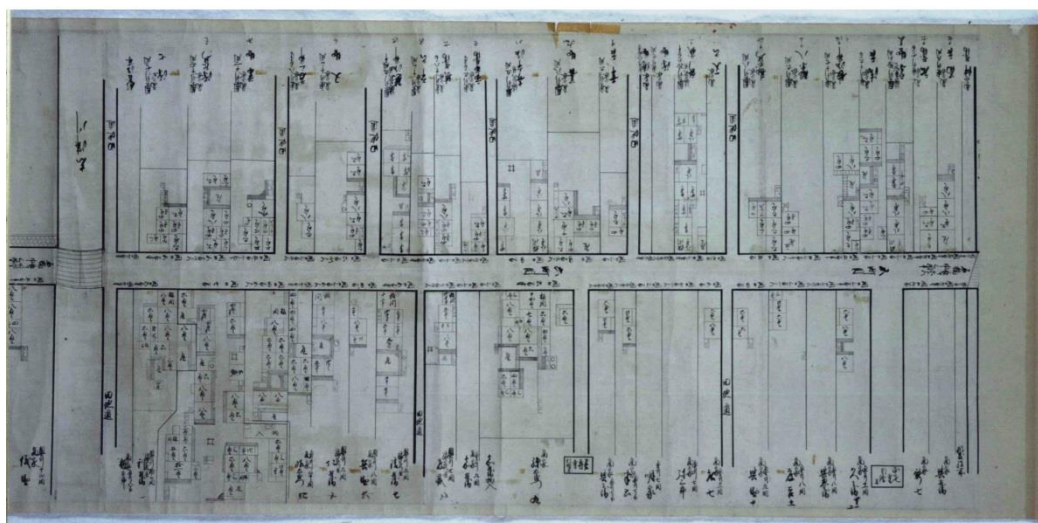


## 描かれた幕末の草津宿—草津宿割絵図—

江戸時代の草津宿は、東西が4町38間(約500m)、南北が7町15間半(約800m)の規模でL字型に町並みが連なり、江戸側から東横町・西横町・一町目～六町目・宮町の9町で構成されていました。現在では、往時をしのぶ景観の多くが失われていますが、幕末に描かれた絵図にその一端が記録されています。

文久3年(1863)、14代将軍徳川家茂の上洛に際して作成されたと考えられる「草津宿割絵図」は、休泊所となった草津宿内の土地割り、休泊にあてる旅籠や商家などの間取りを描いたもので、五町目・六町目の部分が残されています。町並みは東海道に面してその両側に間口が狭く、奥行の長い短冊状の敷地が連続しており、細い脇道や石橋の架かる川によって町内が区画されています。敷地は大きいもので間口が9間6尺(約18m)、小さいものでは1間半(約3m)の規模を確認できますが、3～5間(約5.5～9m)の間口が一般的であったようです。各敷地内には休泊に供される部分の間取りが描かれ、その大半は片側に通り庭を配し、それに沿う形で部屋が連なっていますが、一部は敷地中央を通り庭が貫き、その両側に部屋が広がるなどの様子も見られます。

こうした町並みは、絵図が失われてしまった場所についても同様であったと考えられます。現在でも、かつての草津宿内には短冊状の敷地がよく残り、土地に刻まれた宿場町の歴史をうかがえます。



草津宿割絵図 (五町目・六町目部分)